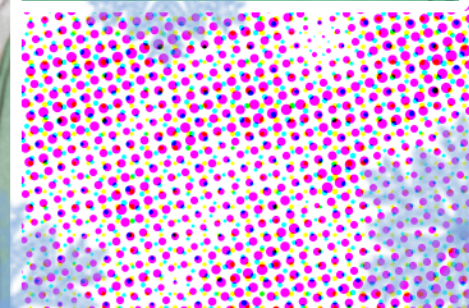
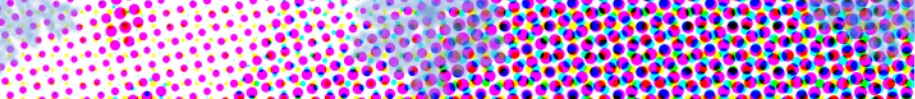


Special
day



Special day



こんにちは、爪舌です。日々なり扉ページにすいません。
(ページ数が足りなかった。。。) このたびはこの本をお
手に取っていただきありがとうございます。この本は以
前お仕事をさせていただいたヨバルトの久藤先生にうよ
きと見せていただいた藤巻赤羽の作品。感激し、
無理言わせていただけた物です。マクシマはいて
すか、それはまたあとがきで。。。
ではでは、楽しんでいただければ幸いです。

こんにちは！「さまよえる物語」を久藤先生です。爪舌さんの
御厚意に感激し、とうとう同人誌を作らせていただいております。
ありがとうございました。爪舌さんという御方は、藤巻赤羽の良き友人として
だけでなく、大変に御厚意の良き御方でした。うよ
きとこの本は藤巻赤羽、入稿その世界から作られてきたのです
ー！ すみません！！ ありがとうございます。楽しんで
いただきます。

追記。。。私のミスでタイトルを落としてました。。。
扉ページから始めるのは「雷井と爪舌」です！
ようし。。。(受) 爪舌

誰かの唸り声が聞こえたような気がして、目が覚めた。むくくと起きあがろうとしたけど、腹部にひきつるような痛みが残っていたので、そのままの状態であたりの様子をうかがう。

病室には四台のベッドが並んでいるが、私のベッド以外は全部空いている。寝具が取り払われたパイプベッドのせいで部屋はひどく殺風景だった。

廊下から差し込む常備灯の緑っぽい光で、部屋の様子はよく見えるけど異状はない。

静かなままだ。なんだ、気のせいかな。

と、その時「どんどんどん！」と激しく天井が鳴った。

「え!? 何? ちょっと」

驚いて見上げる。誰かが上で床を蹴っているようだ。でも…。

この上は屋上だよ? 真冬の北海道、しかも真夜中に、誰が病院の屋上なんかで足踏みしているのだろうか。

ぞわり、と肌が粟だった。ナースコールを押そうかと思っただけで、ベッドの上のライトに引っかけたのでやめておく。腕を伸ばして、ベッドと壁の間から出てきた白い手にぎゅっと捕まったりしたら嫌だから。

かわりに枕元に置いた時計を見る。午前三時。草木も眠る丑三つ時だ。見なきゃ良かった。

思い切り後悔しつつ、時計の針を目で追う。足音が消え、一分、二分と経つうちに、ちよっとだけ気持ちが悪くなってきた。きつと気のせいだ。私、寝ぼけていたんだ。

そう思いこみ、まぶたを閉じた私はそのまま凍り付いた。聞こえたのだ。その声

が。

「た…すけ…」

心臓をわしづかみにされたような感じがした。今の何だ? どこで聞こえた?

「く…苦…く…」

ぜえぜえと喘ぐような不気味な声。その声は確かに部屋の中から聞こえる。私以外にの人はいないはずの部屋の中から!

もうパニックだった。部屋から逃げたい。でも腹の傷が傷むから、軽快に走って逃げることはできない。廊下をもし、下半身のない看護婦さんが上半身だけで追いかけてきたらどうしよう。

仕方ないので布団を頭まで引き上げ、目をぎゅっとつぶる。知ってるお祈りの言葉やお経を口の中で唱える。そうしてないと、口から心臓が飛び出してきそうだった。

「御名が聖とされますように、もう何も聞こえませんが、般若波羅蜜多〜!」

だが、中途半端なお祈りのせいかな願いは聞き届けられなかった。

ぼたぼたぼたぼた、という不気味な音が続いたのだ。何の音? 水があふれ出した音に似ていたけど、でもどうして? 部屋に水道なんてないのに? まさか誰かの血があふれる音なんじゃ…。布団をめぐって確かめたい。でも血だらけの人間がニタツと笑っていたりすると困る。

早く! 早く朝になつて〜!!

心の中で大絶叫しながら、牡丹灯笼の新一郎のように、私はただひたすら祈り続けたのだった。

「松子ちゃん、起きた?」

優しい声に意識を取り戻し驚いた。もしかして、私、いつの間にか寝てた? よだれを袖で拭いっつ、「うう」と唸る。あんなに怖かったのにいつの間にか熟睡していたなんて自分の図太さが少し恥ずかしい。

「どうしたの?」

びっくりした顔して「部屋に入ってきたのはこの病院で一番若い看護士さんの関根さんだった。目がぱつ

ちりしていて、同性から見ても可愛いタイプ。

「朝」飯」

お粥のにおいが心地よい。ああ、恐怖の一夜は終わったんだ。

「助かったあー」

思わず叫ぶと、トレイを運んでいた関根さんは目を丸くして笑った。

「そんなにお腹がすいていたの？ 松子ちゃん、中学二年だっけ？ 育ち盛りだもんね。月曜からは普通食に近づくと思うから、もう少し我慢してね」

運ばれてきたトレイには、お粥の入ったどんぶり、乳酸菌飲料、そして「細田松子」と書かれたネームプレートが並んでいる。私はネームプレートをぼたりと倒し、プラスチック製のレンゲを持った。

自分の地味な名前があまり好きじゃないのだ。「しようこ」とでも読むならまだ許せるけど、「まつこ」だもん。ちなみに弟は竹文という。もうひとり弟がいたら、「梅次郎」とでもつけられたに違いない。その下に妹ができたなら「並」だろうか。

「今日は良い天気よ」

関根さんがカーテンを開いた。途端に病室が明るくなる。雲一つない水色の朝の空が広がっていた。冬の白い太陽光が、いつの間に来た大きなツララに反射してきらきらと光っている。美しい。

トレイの上に目を戻すと、ホカホカのお粥がきらきらと光っている。これもまた美しい。

大手術の後、二日間絶食させられた私にとってお粥は大変な馳走だった。しばしの間、無言で味わい、生きている素晴らしさをかみしめる。生きてて良かった。死んだら何も食べられないんだよなあ。死んだら……

……。思い出してしまった。

夜中のあれ、一体なんだったんだらう？ 夢というには生々しかった。

「関根さん。」「」の屋上つてどうなってるんですか？ 人とか入れますか？」

関根さんは一瞬、怪訝そうな顔をした。

「事故防止のために普段は鍵が掛かっているわよ？ 開いていても今は雪がいつぱいで歩けないでしょうけど。でも、どうして？」

「いえ、別に」

「食べ終わったら検温しておいてね」

体温計を台の上に残して関根さんは部屋から出て行った。

あつという間にお粥を食べ終え、化膿止めの薬を飲むと、私は体温計を腋に挟んだ。そして今日は何をして過ごそうと考えてみる。

学会とかで今日は病院が休みなので、診察はない。休みということ、顔なじみになった常連患者のおばあさんも来ない。病室のテレビは映りが悪いし、かといって暖房のあまり効いていない待合室まで行く気にはなれない。開腹手術を受けたばかりの身に寒さはこたえるのだ。

「入院患者がもう少しいればなあ。おしゃべりできるのになあ。怖い目にも遭わなかったかもしれないしなあ」

空いているベッドを眺め、思わずつぶやく。

雪国の二月といえば、アイスバーンで大転倒した人とか、スノーボードで木立に激突した人とかたくさん入院しているようなものなのに。先生の腕だつて悪くないんだし、顧客をつかむ努力が必要だよ。「麻酔注射増量キャンペーン」でもすればいいのに。

閑なあまり、実にもならないことを考えてしまった。

「新しい本、持ってきてもらえば良かったな」

同級生の美代ちゃんから借りたマンガは、残り一冊を覗いて全部読んだ。残っている一冊というのは、『怨霊の巣くう病院』というタイトルの実録(?)ホラー本だ。血まみれの看護士がカーテンの間から覗いていた話やら、「苦しい苦しい」という声が響く無人ベッドの話が満載されているらしい。

先ほどのあの体験のあとに、こんなものを読むわけにはいかない。ええ、絶対に！
などと考えていたら、窓ガラスがこつこつと音を立てた。誰かがノックするよう
な音。

「おいおい、ちょっと待ってよ。ここ、三階なんだよ。冗談よしてよ。
無視して、別のマンガを手取る。こっちは正統派少女マンガ。難病を克服し切
ない恋を突らせる感動のストーリーになってる。これよ、これ。病院で読むには
こういうのがいいのよ。窓をノックする音なんて無視よ。
こつこつ。」

また音がした。無視できねーよ！ おそろおそろ顔を上げる。

「ぎゃあっ！」

窓ガラスに人の手が張り付いていた。その手はぎくしゃくと鍵の掛かっている
窓を開いた。

「わー!!」

とりあえず、マンガを投げつけてみる。窓の外で、かっつと小気味良い音がした。
「痛っ。おおっ！ 落ちる！ いや、マジで危ないって！」

あれ？ 幽霊じゃない。聞き覚えのある声。そして見覚えのある黒い頭。

「ちう、マンガ使って投球練習か？」

窓から顔を出したのは、クラスメートの富井雄三だった。頭をさすっている。

「元氣そうだな、ホソマツ。ガス出た？」

人なつこい笑顔の富井に、私はキレた。

「ぐあーっ。ホソマツって呼ぶなー！ 女の子に向かってガス出たか言うなー！ 不
気味な登場するなー！」

「あー。寒い。そっち行っている？」

憤る私の返事を待たず、「よっこいしょ」と言いながら、窓枠を乗り越えて病室に
侵入してくる富井。駆け寄り突き落としてみようかと思ったけど、傷のせいで急に

立ち上がれないのでやめた。命拾いしたな、富井。
「なんで窓から入ってくるのよ」
「そこに窓があるから」

「…危ないじゃん」

富井は服についた雪を払い落とし笑った。

「平気。下、すい雪だもん。あ、でも今朝すっげえ冷えたから雪堅くなってるかな」
真っ赤な耳して、馬鹿だなあ。

「階段登ってくりやいのに」

「うん。俺も最初はそのつもりだったんだけど、受付のところにお袋がいたからさ。恥ずかしいっしょ？ 毎日毎日女の子のところに顔出してるって知られたら」

富井は二この病院の一人息子なのだった。つまり、私を執刀したのは富井のお父さん。

救急車で二こに運ばれたときにそれを知って、私は思いきり抵抗した。だって、手術するには裸にならなきゃならんやらないんだもん。クラスメートのお父さんに裸を見られるなんて、嫌だったから。結局見られたけど。うっ。

「日に日に回復してるな。いやー、良かった」

富井はデイバックを下ろし、ジャンパーを脱ぐと隣のベッドに腰掛けた。

「一時、マジでやばかったんだってな。今時、盲腸で死にかけると器用な二こ、普通はなかなかできないよ。破裂寸前まで我慢するなんて、お前、がんばり過ぎ」
自分でも馬鹿だったとは思ってるわよ。

「でも、それがホソマツの良いところなんだよな。ホソマツの頑張った姿といえば」
あ、なんか目が笑ってる。何か思い出しやがったな。富井は続けた。

「体育祭の騎馬戦では感動をありがと。ズボンひっぱられてケツ丸見えになってもハチマキ渡さなかつた君を見て、北野中学のみんなは深い感動に包まれたのでした」
「…あんだ、人の消したい過去をほじくり返すために来たの？」

思い切りドスのきいた低い声で言うと、富井はバッグに手を入れた。

「荷物預かってきたんだよ。山本から」

「え？ 美代ちゃんから？ 何だろう」

「今日はデートだから来れないってさ。ごめんねって言ってたよ」

かわいらしい紙袋を受け取り、少し寂しくなる。親友が病院で退屈してるのに、美代ちゃん、あなたは香気にカレシとデートですか。自分でも拗ねてると思うけど、つい愚痴の一つも言ってみたくなるよ。

「いいよね、カレシ持ちは楽しそっで」

紙袋を覗くと中には、綺麗な包装紙に包まれた小さな箱が入っていた。横に美代ちゃんの丸い文字で書かれた手紙が添えてある。

「病院にいたら富井くんに渡すチョコ、買いに行けないでしょ？ 私が代わりに用意しておきました。頑張ってね。」

読み終えた私は壁に貼ってあるカレンダーを見た。おお、今日は聖バレンタインか！

って、ちょっと待て。なんで私が富井にチョコを…。心の中で文句を言いつつ、富井の顔に視線を戻す。くりくりした大きな瞳。うっ。今まで気が付かなかったけど、意外に可愛い？

「なに？ 何入ってたの？」

興味津々でのぞき込んでくる富井から隠しながら、紙袋の上を丸め台の上に置く。

「な、なんでもないよ！ それよりさー、あんたんちって病院のすぐ隣だよな？」

「うん。隣って言うか、一部病院にくっついてるよ？ 急患あったときにすぐ親父が出て行けるように」

「じゃあさ、夜中にどんどんって蹴るような音、聞こえなかった？」

「蹴るよっかな音っ」

富井が怪訝そうな顔をした。